
守られて幻想郷

果汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守られて幻想郷

【Nコード】

N3880Z

【作者名】

果汁

【あらすじ】

幻想郷 忘れ去られた妖怪や人間が住まう楽園の地

そんな場所に青年が幻想入りをした。

彼は自分の持つ能力のせいで幻想郷の強者たちから捕食的・性的な意味で狙われている。

果たして彼は貞操を守り抜くことが出来るのか？

一話目（前書き）

初投稿です

目指せ完結！！

一話目

幻想郷 忘れ去られた妖怪や人間が住まう楽園の地。妖怪は人間を喰らい、人間は妖怪を退治する。そんなお伽話にあるような話がこの幻想郷では常識となっている。

そして、幻想郷ではいくつもの異変が起き、博麗の巫女が持ち前の感と理不尽な強さでいくつもの異変を弾幕ごっこで解決していた。

しかし、当の本人はというと非常に面倒くさがりな性格をしており、異変が起きていない時は、博麗神社でお茶を飲んでいるか境内の掃除しかしていない。参拝客が来ても鬼のような眼差しで賽銭を入れるように威圧感を与え、参拝客に恐怖という名のご利益を与えている。

そんな素敵な巫女さんの名前は「博麗霊夢」
脇がチャーミングな楽園の巫女である。

しかし、最近になって博麗神社に新たな居候が出来た。素敵な巫女さんと違い弾幕ごっこも出来ず、空も飛べない、特に容姿も整っている訳でもない普通の男である。

「霊夢さんや」

「なによ」

「飯はまだかのう」

「おととい食べたじゃない」

「いや、食事は一日三食だろ!!!」

「なんで三日に一食が常識になつてんだよ」

「うるさい!!! だったらお賽銭入れなさいよ!!!」

霊夢の右ストレートが男の顔面に炸裂。

青年は涙目になりながらも霊夢を睨みつけるが、本人は知らん顔である。

「ぐっ・・・居候先間違えたかな・・・」

「別にここを出て行ってもいいのよ？死にたいのならね・・・」

「自殺願望はないからな。しばらくここで居候させてもらうわ。

ただここで餓死するかもしれんが」

一言多いわよと、霊夢はジト目で男を睨むが、男は先ほどのお返しとばかりにスルーした。

「ああー無駄な体力を使っちゃったよ。することもないし昼寝でもするかねえ」

「その前にあんたには境内の掃除があるわよ。働かない居候に価値はないわ」

へいへいと非常に嫌そうな顔をしながらも、青年は霊夢に制裁が加えられるのを恐れてそそくさと掃除を開始した。

「まったく・・・なんであいつはあんなにグータラなのかしら」

彼女を知るものがその場にいればお前が言うなと総ツツコミを言われたであろう。

それにしても、境内でほうきを手に取り掃除をしている青年を見て彼女は思う。

特に何かに秀でてしているわけでもない、人畜無害な青年がなぜ幻想郷の強者と言われる者たちに狙われているのか。

「幻想郷の『イケニエ』か・・・あいつも運が悪いわね」

そんな青年の名前は「みつる」 数字で書くと326。

幻想郷の強者たちに捕食的、性的な意味で狙われている青年である。

彼の物語はここから始まる

一話目

「うう、今日は一段と寒いな」

博霊神社に居候している青年、みつるは箒を片手に境内を掃除していた。幻想郷は本格的に冬を迎えようとしており、冷たい風が容赦なく襲いかかる。

一通り掃除を終えたみつるはこんなもんかな、と一息つくると箒を掃いていた手を休めた。ふと空を見上げると、黒い影がこちらに接近していた。

黒い影を見つけた瞬間、みつるは持っていた箒を放り投げ、一目散に境内の中に逃げ込もうとしたが、黒い影はスピードを増し、みつるが境内の中に入る前に体当たりを放った。

みつるの断末魔が神社に響き渡り、炬燵でお茶をすすっていた霊夢はまたか、とため息をついた。

「ちょっと魔理沙、掃除したばかりなのに荒らさないでよ」

「なに、私を見て逃げ出した奴がいたからお仕置きしただけだぜ」

黒い影の正体、それは、自称、普通の魔法使い 「霧雨魔理沙」
金色の長い髪が特徴で、黒系の服に白のエプロンという個性的な服を着ている。

脇が出ている巫女さんも個性的だが。

魔理沙は気絶しているみつるを引きずりながらお構いなしに神社の

中へ入り込んだ。

「はあ、それであなたは何しに来たのよ」

「いつも通り暇つぶしと、みつるいじりだぜ」

魔理沙は笑いながら気絶しているみつるの顔をぺちぺちと叩きながら答えた。どうやら彼のこの扱いは日常茶飯事らしい。

「ふう、それにしても今日は寒いな。なあ霊夢、こいつ借りていていいか？」

「会話が全く繋がってないわよ。それにあなたに貸したら帰ってこないでしょ」

「そんなことはないぜ。私が死んだら帰すさ」

「それは帰ってこないとおなじよ」

ちらりと横でピクピク痙攣している男を確認して霊夢は呆れ顔で答えた。この男は気絶しなかった日がないのではないか。そんなことを考えながら霊夢はお茶を口に含み一服した。

だが、彼を気絶させた回数は圧倒的に霊夢が多いのだが、本人は気づいていない。自覚がないあたり、余計にたちが悪い。

するとようやく意識を取り戻したのか、みつるは背中に激しい痛みを感じながらも、気絶した元凶を睨みつけた。

「おいこらあ！！いつも人をゴミのように轢きやがって！！感謝料

を要求する！」

「私を見つけたらすぐ逃げ出すのが悪い。お前に避けられて私の乙女心も深く傷ついている。むしろお前が慰謝料を払うべきだぜ」

「乙女心（笑）いや魔理沙さん冗談ですからその物騒な三二八卦炉をお戻しください」

「ちょっとマスパぶつ放したくなったただだから気にしなくていいぜ」

「いやいや、そんな遊び行こうぜ的なノリで撃たれたら命がいくつあっても足りねえよ」

「ちょっと魔理沙、弾幕ごっこなら外でやってくれる？神社に傷ついたら許さないわよ」

俺の心配より神社の心配かよ、とみつるは心の中で号泣したが、それもいつものことかとすぐに立ち直った。単純な男である。

「そんなことより魔法の森で珍しいキノコが採れたんだ。みつる、ちょっと味見しれくれないか？」

「おい、俺は毒味係じゃないぞ・・・って何だよこのキノコは！！」

「ん？ただのキノコだぜ？」

「ただのキノコに目玉は付いてねえよ！！色も赤と白で気味悪いし」

某赤と緑の配管工のおっさんがパワーアップしそうなキノコを取り

出し、みつるに食べさせようとする恋色の魔法使い。恋色とは何色だと気にしたら負けである。

「ちえっ、ならこのキノコはチルノにでも食べさせるぜ」

渋々キノコを直す魔理沙を見て、みつるはホツとしながらも悲惨な目に合うことが確定した氷精に合唱した。

「てか、たまには外に出たらどうだ？ずっと貧乏神社にいても退屈だろ？」

「貧乏には同意するが、俺が外に出たらバッドエンド一直線だろ」

「まあお前は弱っちいからな。でも安心していいぜ。みつるは私が守ってやるぜ」

非常に頼もしい言葉を受けて、日ごろから扱いは酷いがいざとなったら頼もしい友人がいてよかったと内心感激していた。

「あんた達、貧乏で悪かったわねえ。ところで私も最近運動不足だから弾幕ごっこに付き合ってくれないかしら？」

目は全く笑っていないが、素晴らしい笑顔で二人に詰め寄る霊夢さん。いや、霊夢様。

「ちよっ、魔理沙！！ラスボスが降臨したぞ！俺を守ってくれ！！」

「悪いなみつる。お前の用心棒は今契約が終了したところだ」

さっきの守ってやる発言からわずか10秒足らずで前言撤回。さす

がは魔理沙と褒めてやりたい。

鬼巫女と化した霊夢の渾身のボディブローが、魔理沙が盾にしていたみつるの腹筋を抉り込む。腹筋20回が限界のみつるには耐えられるはずがなかった。

「ぐほつ・・・れいむさんや・・・それは弾幕ごっこやない・・・
ただのパンチや・・・」

しっかりとツツコミを入れて役目を果たしたみつるは呆気なく気絶した。

「別に私の気が治まればどっちでもいいわよ」

「相変わらずこいつの扱いは酷いな」

「あんたに言われたくないわよ。ところで魔理沙、あんたに聞きたかったことがあるんだけど？」

「ん？なんだ？」

「あんたもこいつを狙っているのかどうかよ」

「さあな。ただ興味はあるぜ。なんたってこいつは『器』だからな」

魔理沙の言葉に、霊夢は本日二度目の気絶をしている男の顔を見ながら物思いにふけた。霊夢がこの時何を思ったのか、彼女しかその答えは知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3880z/>

守られて幻想郷

2011年12月17日03時03分発行